

ているのであろう。

内向性で、友だちがこわいといった子どもの場合

山 本 光

現在年長組にいるE子は、一昨年四月に年少児として入園した。年少組の一年間を私が担当したのである。ポツテリとふとって、身長は、その組の女児の中で最高であったが、向性検査法の各項目にてらしても明確にわかる内攻性の子どもであった。入園式当日母から聞いたのは耳の病歴があるという身体的なことだけであったが、その性格は入園第二週目の「オシッコの失敗」から急にあらわれた。非常に不安ないやな経験であつたらしく翌朝から見送りに来た母に泣いてはなれなくなつた。

—— おおきいくせに泣いている——このような印象をすぐに園の生活になれてしまつた外向性のいたずらっこに植えつけた。

同じ机の子どもがE子の顔をなでる、髪の毛にさわる、洋服にさわつたりしてもE子はおびえたようにヒイと泣く。泣けば周りの子どもはふしぎなおもしろさから来てまたさわつて泣かす。ことばで言いきかせてもおさまらない状態になつてしまつた。それにこの組は半分が早生まれという赤ちゃんばい賑やかな組であつた。

毎朝母は困つて訴える。「お友だちがさわつていじめるとかなしそうにいます」「入園前のお友だちあそびはどうでしたか」「社宅のアパートがたびたびかわりましたし家より外にはほとんど出ません。おとなりの部屋のお子さんが家に来ると遊びますが、さそわれなければあそびません」と。中耳炎を二、三度したというのも加わつているかも知れないがとにかくずっと静かなひとり遊びや二つ年下の弟とあそんでいたらしい。このような経験しか持つていないE子にとって、われかえる程元気のよい幼稚園の保育室は戦場のようにおそろしく、ふれ合う友だちの手は兇器のように思われたいのも無理ではなかつたのである。

そこでわたくしは、友だちの手や身体にふれる経験をさせるために、リズムの「むすんでひらいて」をするとき——その手を……お友だちの手とつなぎましょう——その手を……お友だちのあたまにのせましょう——その手を……お友だちのほっぺに……つるつるほっぺをなでてあげましょう——というように毎日友だちのからだにふれるように試みた。またピアノに合わせて行進するとき二人組になつたり、三人組になつたり手をつながせて、リズム運動のころよきに、友だちのふれ合いをとり入れた。子どもたちはみんな大よろこびでおもしろがつたがE子はこわごわである。うっかり手をつなぐ相手がいなくなつたりするとすぐに泣く。とにかく余り笑顔を見せず毎朝泣きわめいた。必らず母に送つて来てもらい、はなれるときは一さわざをする。

E子の仕事は几帳面で、製作の時など、こちらの注意をよく聞いて少しも間違えないです。色のぬり方も非常にいいねいで配色もよく出来上つたものがとても美しい。そういう時は、出来るだけみんなの前では

め、自信を持ってくれることをひたすらに
念じたのであるが、二か月たっても泣きわ
めきは毎朝で、家を出るときもぐずるとい
う。流感対策で休園になったあとなどまた
いっそうぐずるようであった。

六月に入つてのある日またこういう訴え
を母からきいた。「昨日静かにじっくりと
E子にきいてみましたら、先生のおっしゃ
る通りに描いたり作ったり、動いたりする
のはとてもうれしいらしいのですが、自由
遊びの時間がどうにもたえられないとい
うのです」という。私どもの園は園の方針に
より長時間保育であるので五月末頃から午
後の時間が長くなる。その時の自由遊びが
とても苦痛だというのである。ご両親も半
ば、「かわいそうだから退園させた方が本
人のためによいのではないか」という意向
を持つているらしいことがわられた。

自由遊びの時間友だちと遊ぶ時期を逸し
ていたE子は、全く友だちあそびの技術を
知らずひとり遊びをするにしても環境が大
き過ぎて手も足も出ないのである。

そこで今度は次のように試みた。

・絶対に休まないこと、現在の時期を逃
がしては、集団生活や友だちからますます
かたくなはなれてしまうことになるから。

・一日の園生活の時間を特別に短かくす
ること。朝の体操のはじまる九時四十分ぎ
りぎりに登園し、お昼のおべんとかがすん
だらすぐにかえること。午前の時間はおも
に二斉指導であり、中食前に三〇分程の自
由時間があるだけなのでこのような処置を
とることにした。なお帰宅したら「元気で
幼稚園に行つて来ていい子であった」と迎
えてあとは園生活にこだわる話しを余りし
ないことをお願いした。

六月一ぱいこのような状態をつづけたの
であるが、それでも朝は一泣きした。お姉
さん格の子どもにそうとつつけて遊ばせて
みたりする。しばらくはいいがその相手が
おもしろくないらしく手をはなしてしま
うと、また泣き顔になるのである。

とにかく経験のときを重ねるよりほかは
ないと考えた。心の底から「友だちって
いいものだ。友だちがさわるのは仲よしだか
ら。仲よくあそぶのはほんとにたのしい」

ということをかからだで体験させなくてはい
けないと思つた。

七月に入つてもよく泣いた。ラジオの幼
児の時間をきいている時余り大声で泣いて
ほかの子どもが「きこえない」「うるさい」
とさわぎ出した。この時はじめてきつく注
意した。「みんながラジオがきこえないで
困っているのよ。わがままの泣き虫よ」と
いつてひとりだけ別室に連れて行つた。

「うちにかえて——頭が痛い」と言い出
す。真偽の程もわかりかねてその部屋にか
えりまで静かに横にさせた。この間に、自我
を押えなくてはいけないのだということが
わかつたらしく、その翌朝は余りくづらな
かつたという。その頃から少しずつまご
と遊びのお客さまになるようにうながして
みた。きめられた椅子でかたくなって出さ
れたごちそうを困つたように受取つている
ようなことが見受けられた。しかしリーダ
ー格の子どもが「もうよろしゅうございま
すか、こんどはなにをさしあげましょう」な
どと立板に水のように話し動くのを、目を
みはるようじつと聞きながら友だちあそ

びを体験していったことであろうと思われる。友だちというものはざわつてもいじめるものでないということが次第にわかってくるように思われた。

こうしてE子にとっては生まれてはじめての波瀾万丈の一学期が過ぎていった。家庭でもわかって下さったらしく夏休みは積極的に友だちあそびをするようにされていたのではないかと思われた。二学期になってからは「もう早くかえらなくてもいい」と言い出して泣き顔が見えなくなった。運動会や遊戯会などで演ずる動きの流れにもとにかくのり、どうやら集団生活の中におさまることが出来るようになった。二学期の間は友だちあそびがほとんどなく何となく私のそばにいて、ひとり言のような話しかけをしながらひとり遊びをしていた。何か新しい経験をした時に大いにほめてはげますと、とても嬉しそうな顔をするのであった。寒くなつてオーバーの時期がきた。E子は仕事をとてもよくするとところから、オーバーの一番上のボタンかけの出来ない友だちに「F子ちゃんは上手だから先生の代

りにして上げてちょうだい」と私の代りにさせるようにした。毎日の帰りの支度の時に、そのうちにボタンがかけられずに困っている子、袖が通らずにいる子を見つけて「……してあげようか……？」と同じじ自分から言いだすようになった。

本年度は担任がかわりE子のすべてを知ることはい出来ないが、園庭でここに友だちと遊んでいる姿を見ては安心するのである。
(東京・鶯宮学園幼稚園)

E 過依存の子ども

ここに掲げる子どもは過度に依存的な子どもの場合である。最初の例では幼稚園でも、おとなに親しませる段階から、徐々に指導して、かなりの期間の後には、きっぱりと母親から離して成功している。二番目の例では、おとなに対する依存性を、友だちの方にすりかえている。第三の例では、保育者に親しませることに重点をおいている。

過保護のために、過度に依存的になっている子どもへの指導の場合には、わがままを通させないきっぱりとした態度も必要である。しかし、保育者に依存してくるときに、むげに斥けていると信頼関係ができない。依存的な子どもは、必ずしも過保護だけが原因とは限らないから、依存的だから、厳格な態度でのぞむという式の指導はあやまりをおかすことがある。その子どもなりにうけいれてやるのがまず必要である。保育者との安定した信頼関係ができたならば、その次の段階にむりなくすすむことができる。

A 児の成長

大崎 ムツ子

「誰でもよく泳ぐような環境に生活する子どもは、泳ぐ設備のない環境に生活している子どもよりもはやく時期に水泳を習得するであろう。また二つの国語を語る環境に